

上州文化

contents

	巻頭言／天田 研石	②
特集	ぐんまミュージアム散歩／桑原 高良	③
	上野東歌探訪／北川 和秀	⑥
	群馬県教育文化事業団 INFORMATION	⑩
	地蔵文化をつなぐ／角田 浩一	⑪
	ART NOW 「宇宙と生命の絵画」／橘 高みさ	⑫
	自然環境調査からみた群馬の湿原と植物 赤城覚満淵湿原／片野 光一	⑭



「谷川早春」 深谷 徹

巻頭言 書家の思い



社団法人群馬県書道協会会長 天田 研 石

「書は人也」と言われています。特に毛筆で書いた場合、性格や人格まで現れるので、「読み・書き・算盤」の一つとして社会で長く尊重されて来ました。また書は人を育てる一面を持っております。書という道に入って精進努力をし、文章、漢詩・短歌・俳句等に親しみ、仲間と切磋琢磨をして上達をすれば作品にしてギャラリー等で展覽いたします。公募展、社中展、個展も今盛んです。

中国、日本、韓国と言った漢字文化圏の書は世界の中では特殊な文化として、長い歴史を持っております。漢字の起源は今より五千年の昔に遡り、殷王朝・周王朝での亀甲獣骨文字や青銅器に鑄込まれた金文の時代を経て、秦の始皇帝が天下と共に、篆書も統一したわけです。そして漢代の隸書からやがて現在の楷書が生まれました。四世紀東晋の時代に王羲之が現れ、書聖と仰がれております。一月二十二日より三月三日まで、日中国交正常化四十周年を記念して、特別展「書聖・王羲之」が東京国立博物館で開催されました。千六百年の歳月を経ても書家の手本として、その存在が耀いております。手紙や文章と言った実用の書が高い芸術性、精神性を持っている事に改めて書の特異性を感じます。

日本においては、大和時代仏教と共に漢字文化が移入され、聖徳太子の

法華義疏が日本最古の肉筆として残っております。この頃の日本は大陸や半島の技術や文化の導入が盛んで激動の時代であったと思います。奈良時代の初め和銅四年（七百十一年）に多胡碑が建立されました。多胡碑は日本三古碑の一つで、書の評価は高く、書家が臨書（そつくり）に模倣すること）をしてみると、現代の忙しい時代と異なり、大らかで運筆がゆったりしており悠久の歴史の重みを感じます。（社）群馬県書道協会では多胡碑記念館の後援で三月九日より四月七日まで、第十回「群馬書作家展」を開催し、多胡碑の素晴らしさを全国へ発信すると共にこの碑が今後良い形で広く活用されて行く事を願っております。

いま学校教育の現場に書道を教える先生が居りません。詳細に説明をされた指導書を読んでも、地道な修練の積み重ねがなければ、実際には書けません。

将来の文化人を育てるには文字を正しく綺麗に書くことは大切だと思います。パソコンで見る骨だけの文字から、美的感覚を育てる事は不可能です。血も肉も感情もある生きた字を教えることが日本文化の継承と思います。即席と代用品に溢れている現代、将来を担う子供達に本物を教える大人の責任があると思います。

ぐんま ミュージアム散歩



愛と執念のコレクション
「会いたい絵」に癒される

⑤「大川美術館」

桑原高良

桐生市民に親しまれ、自然豊かな水道山。その中腹に全国にも稀有な美術館がある。地元出身の実業家であり、美術愛好家であった大川栄二氏（1924～2008）の長年のコレクションを核にした「大川美術館」だ。松本竣介や野田英夫を軸に、ピカソ、ベンシャーンなどの作品まで、大川氏のこだわりのコレクションで知られる。1989（平成元）年の開館から間もなく25年目に入る個性的な美術館を訪ねた。

◇ 絵は心のマッサージ

「絵に心のマッサージをしてもらっていた」。大川美術館創立者で初代館長を務めた大川栄二氏は、よくこの言葉を口にしていた。大川氏は元三井物産社員、大手スーパードライエーで副社長を歴任するなど企業人としての輝かしい実績を持つ。その激務を支えたのは、心のオアシス、絵画への熱い思いだった。

その思いが高じて、自らの審美眼と直感を信じて収集した多くの美術品を核に誕生したのが大川美術館だ。大川さんは、地元で十数代の歴史を刻む畳屋が生家だ。絵画との出会いは、若き日、肺結核に侵され転地療養生活を余儀なくされた際に、心の慰めに始めた週刊誌表紙絵のスクラップが端緒。当時、週刊誌の表紙には一流画家が表紙絵を提供していた。大川さんにとって、表紙絵は、暗い青春を明るく照らす灯火になったとともに、絵画の魅力を意識するきっかけにもなった。



館内には初代館長 大川栄二氏のパネル写真が
その精神は今も生き続ける



松本竣介の作品コーナーは多くのファンを集める

◇ 本物に出会える美術館

そして、現在の美術館コレクションの核となる松本竣介（一九二一―四八）の作品に遭遇したのは一九六〇年代の初め。「ニコライ堂の横の道」だったという。まだ無名だった彼の作品に、「内面の美」を感じた大川氏は、彼の作品のみならず、同時代を生きた画家、彼とかかわりのあった画家の作品に収集の幅を広げ、結果的に膨大なコレクションに結実させた。現在の収蔵品点数は、大川氏の活動に賛同した寄贈コレクションも含め約七千点、このうち約二千点が入れ替え展示されている。

今年、開館から二十五年目となる同館は、大川氏の膨大なコレクションを基本に、桐生市や民間企業、個人などの支援によって成り立っている。運営は公益財団法人「大川美術館」。もちろん、開館初代の理事長兼館長は大川氏が就いた。資金協力をお願い、企画や展示方法にも積極的にかかわり、館内外での絵画作品解説にも先頭に立った。時には厳しく、時には優しく、強烈な個性で館をけん引し、「大川カラー」が全館に徹底されていた。

具体的には、松本竣介、野田英夫などの日本近代洋画の常設展示、日本人画家に影響を与えたピカソなど海外作品展示、オリジナル企画展などが柱。その根底には「本物を常設で展示するミュージアム」への強いこだわりがある。同館学芸員の小此木美代子さんは、大川美術館の果たしてきた役割や大川



落ち着いた雰囲気の内観



庭園部から美術館や野外テラスを見る

氏について、「コレクション研究・常設の展示など美術館の本来的な役割を活動の根幹として貫き、『逢いたい時にいつでも逢える名画の館』を広く人々に提唱してやることができました。大川館長からは、作品、作家、その「人格」と素直に真摯に向き合うことの大切さ。自分の足で、目で、実作を訪ね、見ることなど、多くのことを学びました」と語る。

度々の病を克服し、美術館を守り続けた大川氏が亡くなったのは二〇〇八（平成20）年十二月。強烈な個性の人の死は、コレクションの行く末も含め、注目を集めることになったが、関係者の尽力もあり、二代目館長に寺田勝彦氏が就任、現在に至っている。

寺田さんは「先輩が大川さんの美術館構想に関わっていた経緯があり、開館前からこの美術館のことは知っていました。私が館長を引き受けたのは、館存亡の危機だったからです」と振り返る。

◆ 不思議な美の空間

それでは、そのこだわりの美術館を紹介する。この館は不思議な建物だ。水道山の山麓にある美術館入口

から見ると平屋のような造り。だが入館すると、そこからいくつかの展示室が階を降りるように設けられている。かつてここは社員寮で、その後、増築・改装された。山肌の傾斜を利用して、平屋に見えたりするが、一部四、五階建ての構造だ。そこには、国内外の画家の作品が展示室ごとにテーマ性を意識して飾られている。もちろん松本竣介の作品ゾーンもある。彼の作品を見たくて全国からやってくる「竣介ファン」も数多い。

大きな展示室には、ソファや彫刻も置かれ、個人の邸宅のような雰囲気の中で、お目当ての作品と親密な時間を過ごすことができる。学芸員による解説会や移動美術館なども積極的に取り組んでいる。桐生市の協力もあり、児童生徒の見学も目立っている。

一室に多くの作品を飾る展示方法も、開館当初に比べると穏やかになったが、「本物を数多く見てもらおう」という大川氏の方針が今も貫かれている。館内には、前館長の生前の笑顔のパネル写真も展示されているが、今もどこからか、独特の大川氏の声が聞こえてきそうな気配が感じられるから不思議だ。

◆ 喫茶と庭園も人気

鑑賞に疲れたら、下層の喫茶室に足を運ぼう。コーヒ、紅茶だけでなくビールもある。もちろん軽食もある。喫茶室の外には野外テラスも設置され自然の中でお茶を楽しむこともできる。美術館わきの石段を降りると喫茶室のみの利用もでき、絵が見たくなったらそこで入館手続きも可能だ。

テラス前には、四季折々の変化を見せる庭園が整備されている。ここからは桐生の市街地が一望できる。



公益財団法人「大川美術館」

桐生市小曾根町 3-69（水道山中腹）

☎ 0277・46・3300 Fax 0277・46・3350

開館時間：午前10時～午後5時

休館日：月曜日（祝日・休日の場合は開館、翌日休館）

入館料：一般1000円、高・大生600円、小・中生300円

【企画展・常設展共通、団体割引あり毎月第一土曜日は2割引】

◆ ミュージアムショップも充実

館フロント近くにあるミュージアムショップで人気なのが、収蔵品の絵葉書だ。好みの画家の作品絵葉書をまとめて求める人もいる。また企画展の図録も美術愛好家には人気だ。織物の都、桐生ならではの布製品も置かれている。



ミュージアムショップには作品の絵葉書も

寺田勝彦館長に聞く

「次代を見据え館運営」

多くのファンを持つコレクションを有し、強烈な個性を持った創設者、大川栄二氏の魂が染み込んだ大川美術館。後継として二代目館長を務める寺田勝彦氏に聞いた。

―館長を引き受けて四年。二代目館長として、今思うこと
寺田 いかにも三代目につなぐかが、私の使命です。

この館をなくしてはならないのです。現に、ここにこれだけの美術館が出来ていて、大川さんが二十余年守ってこられ、地元の市民にも、全国の美術愛好家にも注目され、愛されてきた。それを、煙のように消してしまふわけにはいかない。私自身もこの美術館に魅力を感じていたので、これはもうやるしかないと思って、三代目への橋渡し役としてやってきました。そして今、本当の意味での、大川美術館館長にふさわしい次の方に、橋渡ししたいと思っています。単なる一地域の美術館ではなく、ここ（桐生）に存在することで、さらに地域や市の評価が高まる美術館にしたい。そのためには、時代の新しい空気を取り入れていかなければなりません。ただ、この美術館は、大川栄二という非常に個性の強い人間の美術館であることは確か。その精神が館内随所にしみこんでいます。展示方法を少し変えただけでも

「大川さんと違う」ということになつてしまふ。その中で、私なりに四年間やってきました。

もう少しで、次につなげられるかなというところまで来たと感じています。

―大川美術館の課題と今後について。

寺田 大川さんの理想から言えば、この館は「コレクション」の常設展示を基本とした美術館でいい。それを求めて人が来る」ということです。「絵は人格である」とおっしゃっていましたが、人の付き合いと同じで、深く付き合えば、付き合うほど良さが分かる、何度も通ってもらえればより美術作品への理解が深まるというのが大川さんの持論でした。ところが現実はどうか。「二度見たからいい」「展示がいつもと同じなら、行かない」という声も多い。大川さんの理想はよいが、そこまでは見る側（市民）の意識が到達しない。なかなか入館者が増えない。

私たちも、移動美術館、出前授業など市民や学校、若者たちに働きかける活動も続けており、桐生市も開館以来、さまざまな面で支援してくださっています。しかし、経済情勢が好調で、企業にもゆとりがあれば、民間からも支援が受けられるかもしれませんが、今はそういう時代ではありません。寄付をしてくださる企業や個人も減ってきています。基本財産の果実が期待できない時代なのです。

では、その入館者をどう増やすか。ひとつはPR、広報です。人手が無い、広告費もかけられない中で、どうするか、私は口コミが最大の武器だと考えています。いろんな催しや会合に出て、一人でも多くの人に館のことを紹介し、来館してもらうことに努めています。足を館に運んでいただければ、必ず満足してもらえます。また、全国の美術館から貸し出し要請のある松本竣介などの作品は、大川美術館の名（存在）を広

く多くの人に伝えるのに役立っています。この館同士の交流は、うちの企画の時には活用できます。

◎館長おすすめポイント

市街地を一望

私のおすすめは、喫茶室テラスや庭園などからの市街地の眺め。それはそれは素晴らしい。自然豊かな庭園は、四季折々さまざまな姿を見せます。

花が咲き、鳥が鳴き、心を癒してくれます。近県から訪れた女性が、見学後、テラスで一日読書している姿を見ました。尋ねると、展示作品も、ここから見える景色も素晴らしいと話してくれました。

見学に来た高校生が、喫茶室前の庭から市街地を眺め、「桐生にこんないいところがあるなんて知らなかった。まるで空中庭園だ」と言っていました。日常生活から開放される空間かもしれません。



大川美術館（手前）からは市街地が一望できる

桑原高良

（くわばら たかよし）

群馬ペンクラブ会員、群馬県文学会議会員。

1950年生まれ。74年に上毛新聞社入社。藤岡支局長、前橋支局長、編集局文化部長、出版局次長、文化情報誌「上州風」編集長、編集局次長シャトル太田支社長。館林の編集長。2011年3月退職。現在、中央カレッジグループ学園新聞編集長。著書に『二足の草鞋と本音人生―聞き書き大川栄二』『わがこころ語る上州人 塩原友子』『初代コロムビア・ローズ物語―人生は歌とともに』（いずれも上毛新聞社刊）。

上野東歌探訪

(12)

北川和秀

一九五一年生。学習院大学大学院人文科学研究科国文学専攻博士課程修了。同大学助手を経て、一九八五年群馬県立女子大学文学部専任講師。現在は同大学教授。専門は上代文学。主な著書に『続日本紀宣命 校本・総索引』『群馬の万葉歌』など。

一、山名丘陵の歌碑について（前回の補足）

前回は、やや番外編のような趣きで山名丘陵の万葉歌碑を紹介した。今回はその補足や訂正から始めたい。

前回七ページに掲げた「『石碑之路』万葉歌碑一覧」の表に示した「建碑年」の項は、古谷野善三郎氏『群馬の万葉―万葉の歌碑を訪ねて―』（群馬出版センター。平成二十三年十一月）のデータを使用して頂いた。学恩に感謝するとともに、その旨、前回記さなかった非礼を古谷野氏にお詫び申し上げる。

同表で⑮～⑳の五基（これらは古谷野氏の著書には収録されていない）については、建碑年を「未詳」としたが、これらの歌碑は昭和五〇年代に制作され、現地まで運ばれたものの、その折は設置されるに至らず、昨年、石碑の路再生プロジェクトの努力によって初めて日の目を見たもののようである。そういった経緯から、設置年は「平成24年」とすべきものと思う。そのように訂正したい。

昭和天皇の御製の歌碑が山名丘陵に設置されている理由の一つとして、昭和九年の陸軍特別大演習に際して、昭和天皇がこの地で演習観閲を行っている（山名八幡宮の裏手に「御野立所跡」と称する場がある）ので、その記憶が重なっている可能性があるのではないかとのご教示を、群馬県立女子大学群馬学センター副センター長の熊倉浩靖教授からいただいた。熊倉氏に感謝申し上げる。

前号の最後の段落に「⑮～⑳の五基」という大変に無様な誤植が生じている。これは当然「⑮～⑳の五基」とあるべきものである。最終的な確認を怠った私の責任であり、何とも無残な誌面になってしまったことをお詫び申し上げる。

二、「八尺の井手に」の歌について

前々回、「上毛野安蘇の真麻群かき抱き寝れど飽かぬを何とか吾がせむ」（三四〇四）の歌を取り上げた。性愛に対する激しい心情を率直かつ大胆に表現している歌であり、そういう点で中央の歌にはあまり例をみない東歌らしい作である。今回は、この歌と通ずるところのある二首を取り上げる。一首は前回も少し触れた「子持山若鶏冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何とか思ふ」（三四九四）であり、もう一首は「伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の踊るまでもさ寝をさ寝てば」（三四一四）である。まず後者からみてゆく。

伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の踊るまでもさ寝をさ寝てば（三四一四）

伊香保呂能 夜左可能為提尔 多都努自能 安良波路万代母
佐祢乎佐祢弓婆

榛名山麓の高い井堰の上に現れる虹がはつきりと見えるように、そのようにはつきりと二人の仲が明らかになってしまふほど、共寝をしていられたらなあ。

「伊香保ろ」の「ろ」は、名詞や形容詞連体形に付く接尾辞で、親愛の情を表したり、語調を整える役割を果たす。記紀歌謡に見られる他は、東歌・防人歌や常陸国風土記など、用例は東国のものに集中している。「伊香保ろ」自体も、

上野国東歌に四例あり、他に「伊香保の嶺ろ」「久路保の嶺ろ」の例もある。古代日本では、八という数は、実数をあらわす他に、「多数」「多量」の意味で用いられることもある。「八尺」は実数ではなく、「大きな」「高い」ということである。「井手」は灌漑のために川の水を塞ぎ止めた場所。井堰。「泊瀬川ながるる水脈の瀬を早み井手越す波の音の清けく」(一一〇八)といった例がある。「井手」を地名と見て、群馬郡井手郷(現在の高崎市井出町が遺称地とされる)とする説があるが、その場合は、「八尺」も地名としなければならぬ。「伊香保」が大地名、「八尺」がそこに含まれる中地名、「井手」がさらに「八尺」に含まれる小地名、という関係である。古代、井手郷を含む八尺という地名があったことが明らかにならないと地名説は成り立ちがたいであろう。「井手」を地名でなく井堰とした場合、「八尺」が地名である可能性はある。

「虹」についてはやや長くなるので、節を改めて述べる。

「顕ろ」は「顕るる」の東国方言で、万葉集の用例はこの歌のみ。上三句は「顕ろ」を言うための序詞である。「さ寝」の「さ」は接頭辞。「さ寝」は動詞の例と名詞の例とがある。寝ることであるが、男女の共寝という場合が多い。万葉集に三三例あるうち、人麻呂、赤人、憶良、家持の例もあるが、東歌・防人歌に一三例あり、全体に対する比率の上では東歌・防人歌の例が目立つ。万葉集には男女の仲が



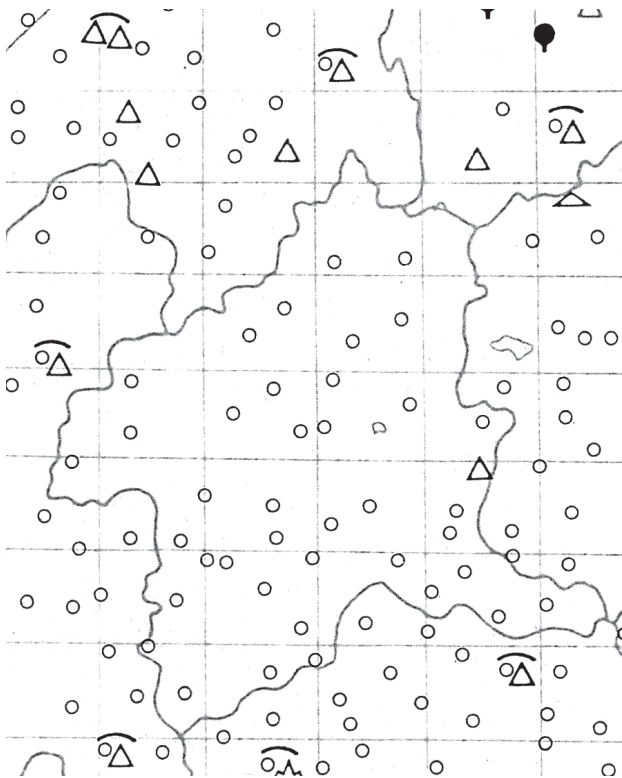
「八尺の井手に」歌碑

他人に知られるのを嫌う歌が非常に多い。それは中央と東国とを問わない。この歌も人目を気にして、十分に共寝をすることができない歎きと、思う存分共寝をしたいという願望とをうたっている。「人目を気にせずに会いたい」というのでなく、「人目を気にせずに共寝をしたい」というあたりがストレートである。

写真は、水沢観音の駐車場付近にあるこの歌の歌碑で、書は黒澤春來氏の手になる。文字面の形状は虹をかたどっている。

三、「虹」について

虹を「のじ」と言うのは東国方言。時代は降るが、江戸時代中期の方言辞書『物類称呼』(安永四年(一七七五)刊)に「虹 にじ〇東国の小児。のじと云。」(巻一「天地」とある。「東国」というのはずいぶん広い範囲であるが、これに



「虹」(『日本言語地図』から)

よれば、江戸中期、東国では幼児語に「のじ」という語形があったらしいことが分かる。近代になると、『群馬県邑楽郡誌』（大正六年（一九一七）刊）の前編附録「二、方言」に「のじ 虹」とある。大正時代、邑楽郡では「のじ」という語形が使われていたことがわかる。

図を示したのは『日本言語地図』（国立国語研究所編。昭和四一年（一九九九年刊）に収録されている「虹」の地図の一部である。調査対象者は各地点一名で、明治三六年（一九〇三）以前に生まれた、その土地生え抜きの男性である。○は「にじ」、△は「のじ」、扁平な△は「のーじ」という語形を表している。群馬県内に一ヶ所だけある△の地点は桐生市梅田町五丁目である。県内一円「にじ」という語形であるが、ここにだけ「のじ」という語形が現れている。もう少し視野を広げると、群馬県と境を接する新潟県・福島県・埼玉県・長野県の山間部にも△のマークが点々と見える。こういった状況からは、古くは「のじ」という語形がこのあたり一体に広く分布していたのが、やがて「にじ」に圧迫されて、「のじ」は一部地域にのみ残存するに過ぎなくなったのであろうということが推測される。明治三年（一八九〇）、群馬県西群馬郡上郊村保渡田（現在の高崎市保渡田）に生まれた土屋文明氏は、その著書『万葉集私注』の中で、「ノジと発音するのは注者の少年の頃にも村裡には行はれた」（三四一四番歌の語釈）と述べており、参考になる。

なお、万葉集には四五〇〇首以上もの歌が収録されながら、「虹」が登場するのはこの歌のみである。万葉集に限らず、上代文献を見渡しても、「虹」は古事記に一例、日本書紀に三例、常陸国風土記に一例、常陸国風土記逸文に一例程度しか見当たらない。用例は以下の通りである。

① 新羅国の阿具沼のほとりで昼寝をしていた女の陰部のあたりに、日光が虹のように射した。女は妊娠し赤い玉を生んだ。（古事記 応神）

② 男と通じたと讒言された伊勢斎宮の袴幡皇女が、神鏡を持ち出して土中に埋め、自殺した。やがて虹が蛇のように立ち、虹の付け根を掘ったところ神鏡が見つかった。その近くで皇女の遺体も発見され、遺体を調べた結果、皇女の潔白が証明された。（日本書紀 雄略三年四月）

③ 宮中の殿舎の中に大きな虹が出た。（日本書紀 天武十一年八月五日）

④ 夜明けに、虹が空の中央に、太陽に向き合って出た。（同 同一七日）

⑤ 建借間命が賊を討伐するための策略として、海岸や船を飾り立てた。その時、虹のような旌を張った。（常陸国風土記 行方郡）

⑥ 黒坂命の葬儀の際、雲が飛び、虹が架かって、野や路を明るく照らした。（常陸国風土記逸文 信太郡）

このうち①と⑤は虹そのものではなく、「虹のように」という比喻で用いられている。その①も含め、①②の虹は神秘的な存在である。③④は一連の地震、冷害、大風、異常な天体現象などの中に位置づけられているので、不吉な存在という扱いのようである。古代中国では虹は不吉なものとされていたので、その影響を受けている可能性もある。中国の影響を考えずとも、虹の正体が分からない古代日本人にとって、虹は素直に美しいものというよりは不気味な存在だったのかもしれない。一方、⑤⑥の常陸国風土記及びその逸文の例からは、純粹に美しいものという認識もあったことを窺わせる。地域差もあろうか。

時代が降っても、文学作品に現れる「虹」の用例は少ない。源氏物語、平治物語、平家物語には「虹」はそれぞれ一例ずつしか見えず、それらはすべて「白虹日を貫く」という成語である。これは中国の『戦国策』に出現のある句で、臣下が反乱を起こして君主に危害を加える前兆であるという。

数は少ないながら、これらの虹の用例を見てゆくと、どうも虹は単なる自然現象ではなく、何か神秘的なものと考えられていたらしい。虹がこのような存在であることを念頭に置くと、今回取り上げた歌はどのように解釈されるだろうか。二人の男女が共寝を繰り返すと虹が立つといった俗信が存在し、この歌はそういったことを踏まえてのものであった可能性を考えるべきかもしれない。あるいは、前掲⑤⑥のような常陸国の例を東国に拡大して考えてよいのであれば、上野国でも虹に特段の意味はなく、単に美しく目立つ存在とみていたという可能性もある。さて、どのように考えたらよいのか。判断に迷う。

四、「子持山」の歌について

子持山こもちやま若鷄冠わかけかん木の黄葉もみつまで寝もと吾わは思おもふ汝なは何あどか思おもふ（三四九四）

児毛こもちやま知夜麻わかかへる和可わかかへる徹流弓能もみつ毛美都麻弓もみつ宿毛等ねもと和波毛布わはもふ
汝波安なはあど杼可毛布かもふ

子持山の若いカエデの葉が秋になって色づくまで、あなたと共寝をして
いたいと思う。あなたはど思う？

この歌は、万葉集には未勸国歌（国名不明の歌）として収録されている。「子持山」は渋川市の子持山と考えるのが通説のようにになっているが、確証はない。渋川市の子持山の名の由来には諸説ある。この山はコニーデ型火山で、山頂にカルデラがあるので、その形状から、親が子を抱えている姿に見立てたとする説、その形を女陰に見立てたとする説、赤城山西麓から望むと女性が仰向けに横たわっているような形に見えるからという説などである。最初の説はともかく、他の二説は「子持」の説明になっていないのではなからうか。私は、何の予備知識もない頃に、南側からこの山を望み、西に並ぶ小野子山とセットにして、子持山を親、小野子山を子と見なしての命名であろうと思ったのだが、いかがであろうか。写真は、渋川市半田からこの二つの山を撮影したものである。二つの山をセットにして妹背山と命名したり、山頂が二つある山を二上山、二子山などと名づけることはよくあることである。子持山という名もそれに近いように思う。現に、群馬県内でも旧碓氷峠の東に子持山という名の山がある。埼玉県秩父にも小持山がある。普通名詞的な固有名詞であり、同名の山が他にもあるとすれば、渋川市の子持山が有力な候補ではあるにしても、そこそ決定することはできない。

「かへるで」はカエデの葉。形が蛙の手に似ていることによる命名。それが音韻変化を起こして、のちに「かへで」となった。「若かへるで」は、春から初夏にかけての青々としたカエデの葉。「もみつ」は秋になって紅葉すること。

動詞「もみつ」の名詞形が「もみち」で、のちに「もみぢ」と濁って発音されるようになった。「寝も」の「も」は推量の助動詞「む」の東国方言形。「あど」は「など」と同じで、これも東国方言。どのように。

春から秋まで半年間もこのままずっと共寝をしたままの状態だったという途方もないことをうたっている。しかし、最後に、「私はこう思うけど、あなたはどう思う？」と尋ねているところに、何とものとほけた味がある。大胆な内容ではあるが、あつけらかんとした明るさを感じる。



右が子持山、左が小野子山

平成 25 年度 第50回群馬県文学賞受賞者

第 50 回を迎えた平成 24 年度「群馬県文学賞」の受賞者が決定し、昨年 11 月 15 日に県庁昭和庁舎正庁の間で授賞式が挙行されました。

この文学賞は「本県における文学活動の振興をはかるため、一年間における文学各部門の創作活動のうち、特にすぐれたものを選奨する」もので、7 部門に分かれています。短歌、俳句、詩、小説、評論、随筆、児童文学の全ての部門で心のこもった力作が受賞されました。

- 【短歌】 下山信行（前橋市）^{ひびこれこうじつ}「**日日是好日**」（30 首）▶日常生活の中に素材を求め、気持ちを素直に詠んでいる。作者の人の柄が伺われる。▶無所属、東京、毎日、産経新聞の投稿者である。
- 【俳句】 原田要三（前橋市）「**良寛の風**」（30 句）▶日常身の些事を把えながら、詩性は瑞々しく、発想に意外性があり、古い俳句の枠を破り、伝統を重んじ乍ら、現代俳句の求める方向性を示している点は見事。新鮮な詩風は、伝統を固執しつつ、俳句詩芸の正統を踏まえて、みづみづしさを発揮している。
- 【詩】 篠木登志枝（太田市）「**雪晴れて**」（他 4 編）▶表現技術に優れ、地道な詩活動を継続するなかで培われた冷静な視点や心情を巧くまとめて表現している。「雪晴れて」「灰燼」「夏帽子」ほか 2 篇。
- 【小説】 高橋ひろし（前橋市）「**山のまつり**」▶赤城の北を思わせる山間の殿池村に展開する四年生の修と五年生のまあちゃんとの友情や家庭事情からくる友との別れを山のまつりの獅子舞や笛や太鼓の響きを背景に見事に描いた力作である。
- 【評論】 水野真由美（前橋市）「**小さな神へー未明の詩学**」▶二十年に渡って発表してきた俳句評論を一本に纏めたものである。「戦後俳句」を自らの出立の場所として引き受けながら、俳句が持つ様々な接点を辿るなかで、俳句とは何か、その形式の意味を真摯に問う論集となっている。
- 【随筆】 岩崎利雄（伊勢崎市）「**涙のシンシン**」地獄の戦場東部ニューギニア戦線・ジャングルに生きる▶東部ニューギニア戦線から生還した九十歳を越える中島松夫氏から二年に及ぶ聞き書きを行って纏めたもの。現地民とのジャングル生活を経て、昭和二十四年に帰還した中島氏の記憶力に驚かされるが、それを丁寧に聞き取り纏めた岩崎氏の筆力は見事。記録性の高さもさることながら、文学性も高いものである。
- 【児童文学】 新木貴久江（伊勢崎市）「**翔太とホルンじいちゃん**」▶東京オリンピックが開催された時代の、利根郡の山村の様子が心豊かに描写されている。主人公と都会からの療養生活者との交流も、会話を中心に読みやすく書かれている。

平成 25 年度 群馬県教育文化事業団高等学校等奨学金 奨学生募集 !!

この奨学金は、無利子です。家計のことが心配な方、先生に相談して申し込んでみませんか。

【申 込 資 格】

1. 父母又はこれに代わる者（親権者等）の住所が群馬県内にある人
2. 高校の学習成績が 5 段階法による評定平均で 3.0、高校の成績が未評定の場合は、中学 3 年生の学習成績が 3.5 以上（成績基準に満たない場合でも特例推薦の制度があります。）
3. 親権者等の合計所得金額が当事業団の定める基準額以下
4. 連帯保証人を 2 人立てられる人（1 人は親権者等、1 人は別生計で返還能力を有し、貸与終了時に 60 歳未満の成人に限ります。）

【申 込 期 間】

- ・一次募集 平成 25 年 4 月 17 日（水）～平成 25 年 5 月 15 日（水）… 4 月採用
- ・二次募集 平成 25 年 8 月 21 日（水）～平成 25 年 9 月 11 日（水）…10 月採用 注：学校から事業団への提出期間です。

【申込先】

在学している学校で申込書を受け取り、指定された期限までに学校へ提出してください。

【貸 与 月 額】

公立高校等		私立高校等	
自宅通学	自宅外通学	自宅通学	自宅外通学
18,000 円	23,000 円	30,000 円	35,000 円

※高校 1 年生（一次募集・二次募集共）を対象に、入学一時金の貸与制度があります。（公立高校 50,000 円、私立高校 100,000 円）

【返還について】

返還年数は貸与を受けた金額により決まります。（6 年から 14 年をかけて返還していただきます。） 返還方法は年賦・半年賦・一括返還から選んでいただきます。

返還開始は、卒業（貸与終了）時に返還手続きを行い 9 か月経過後から始まります。（中途終了者、一括返還者を除く）

※ 大学・専門学校等に進学した場合は、返還猶予申請を行うことにより、その期間の返還が猶予されます。

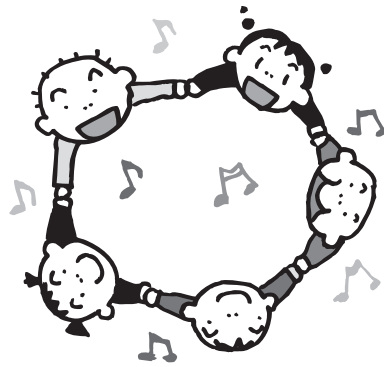


詳しくは、在学している学校または群馬県教育文化事業団までお問い合わせください。



中之条町文化協会長
角田 浩一

地域文化をつなぐ



地域の伝統文化平獅子舞

私の住む平地区は中之条町の東部に位置し中之条町から沼田に通じる国道一四五号線沿いにあり、戸数一一〇戸程の小さな集落である。

ここに昔から伝承されている平獅子舞がある。今日まで古文書等を見出すことはできないが、獅子頭等を保管をして置く箱に「宝暦八」年（西暦一七五八年）の記載があることから、それ以前から伝承されていることは確実とみられている。今から二五五年前。古老の話によると、この時代から農家の長男が代々この舞を受け継ぎ、明治の神社合併により現在は、畑の中に礎石の影も見えるべきもなくなってしまうが、平字柳田に諏訪神社があり、これに奉納したものと言われている。現在は、五穀豊穡、家内安全、天下泰平、無病息災を願って地域の守り神である平毘沙門天の祭典（春分の日開催）、和利宮吾妻神社の祭典に奉納している。祭典には多くの見学者やカメラマンが来て大変賑やかである。

なお、このほかに中之条町産業文化祭の郷土芸能発表会に出演している。

獅子舞は、昭和九年、一四年と、第二次世界大戦による中断を挟み三四年にとびとびに奉納されていたが、昭和四十六年平青年同志会（会員は一八才から四〇才）が発起人になり、平地区に再び獅子舞をスローガンに戦争前に踊った経験のある古老達に声をかけ、笛、太鼓、歌、踊りの指導を受け、前庭、後庭の二時間の踊りを六ヶ月掛け練習し獅子舞が舞えるようになり、現在まで継続されている。

資金面でバックアップするため、昭和五十一年には、平獅子舞保存会が結成された。幸いにして平地区には、平協和会（平地区全戸加入）という組織がありこの平協和会を母体とし保存活動が行われている。

平青年同志会も会員の減少により、後継者不足になり、後継者育成を兼ねて、五三年から小学生を中心とした子供獅子舞を発足させ現在に至っている。通常の活動のほか、昭和五二年NH

Kテレビお国自慢西東に出場、群馬県郷土芸能発表大会参加、六三年群馬県芸術祭、平成二年群馬県少年文化祭、七年関東郷土芸能発表会等に出場（宇都宮市）している。

練習場所は、昔は申し込みのあった家を宿として、家の土間に「ねこ」（ワラを五センチ位の厚さに編んだ一五〇センチ×一八〇センチの大きさのもの）又は、「むしろ」を敷いて習ったものであるが、その後小学校の講堂を借りて練習をしていた。

平成二年には、私を中心となり、それまで個人の家の土蔵をお借りして獅子舞の道具を保管していたが、町からの補助金と平地区民の寄付金を募り平毘沙門天のお堂の裏に文化財保存研修施設を完成させ道具の保管と、練習をここでやっている。

平成二三年には、四〇周年祝賀会が盛大に開催されたが、少子高齢化により後継者の小学生が少なくなり、教える人も又高齢化してきており、この存続が今後の課題となっている。

宇宙と生命の絵画

さ み 高 木

子供の頃から絵を描くことが好きでした。白い画用紙に自由に線を引き、色を塗り重ね、思い浮んだ物事がかたちになってゆく。目の前の風景も、人物も、感動した事も、想像の世界も、絵にすれば私だけの色とかたちで表して伝えることができます。子供だった私にとって絵を描くことは何よりも楽しい遊びであると同時に、外界と自分の内面を繋げる手段のひとつでした。学校に行く、食べる、寝る、そういった当たり前の日々の生活の中に「絵を描く」ということも同じように日常的なことでした。

学校や家庭などの生活環境の中で時に矛盾や不安、挫折感に悩むことが子供の頃の私にはよくありました。それはきつと誰でもそういう時があつて、大人になり、社会に出ても人それぞれ様々なことに悩みを抱えながら生きていることは同じだと思えます。思い通りにならない、しがらみだらけの世界の中で、自分はどうすればそういった悩みから解放されて自由になることができるのか？そういう思いに苛まれ、

どうしたら良いのか解らなくなってしまう時は、無心になって絵を描きました。描くものは道端に咲く花や、近所の野良猫などの身近なものから、本やテレビで見た遠い国の風景、それから見上げればいつもそこに大きく存在する空など。目にとまった光景を心の中で大事に温めておき、それを自分なりの色を使ってかたちにしていきました。絵は「小さな感動」をずっと忘れないために必要な作業だったのです。

絵は未完成に終わることもありますが、そういった作業を続けてゆくうちに、違う視点から世界を見ることが出来るようになり、自分の悩みがこの世界の中でどれだけちっぽけなものだろうかと思ひ、自分の知る世界がこの世の全てではないのだと気付きました。絵を描くため様々なものを観察していくうちに、全てのものは太陽の光を受けて七色に輝きながら存在しているという、重要な発見もありました。それは、希望に繋がりました。

現在の私は抽象画を中心に油絵を描いています。絵にあまり興味の無い人からは「抽象画は難しくて解からない」と言われることがあります。それでは何故、私が、実際に目に見える形ではない抽象的なものを絵描くようになったか、これからお話ししたいと思います。

私にとって絵を描くということは、エネルギーの「研究」なのです。「エネルギー」は目に見えるもの

ではありません。しかし、確かに存在するものであり、私達はエネルギーを感じたり、与えたりしながら生きています。例えば、人とのコミュニケーションの中で、元気をもらうことがあります。美しい自然の風景に心を癒されることもあるでしょう。また、記憶に新しい東日本大震災では、大自然の脅威に人々は打つ手もなく、その大きな力に私達は人間の築き上げた物質的な社会の弱さを思い知らされました。私達は、そういったあらゆるエネルギーがぶつかり合い、交差しながら在り続ける宇宙の中に存在して、それを感じています。

「宇宙」というと、漠然としたイメージで、夜空に輝く天体や銀河を想像する方も多いと思いますが、私は宇宙とは生命そのものなのではないかと考えています。では、生命とは何でしょう。私は絵を描きながら、ずっと問い続けています。

絵を描くためには、自然を観察することが重要です。そうして気付くことがたくさんあります。例えば、植物は花を咲かせ、種を残し、次なる世代へと生きようとするエネルギーを持っています。花を描こう





とする時、花の色や形などの表面的な姿を写しとろうとするだけでは表現力の弱いものになってしまいます。芽吹き、花を咲かせ、散り、枯れて、種を残す。その全ての現象を含めた姿を花という題材に心を込めて描き上げることが出来なければ、真の美しい花の絵は描けないのです。花の持つ生命力を表現出来なければ、それはアートではないのです。

その、生命力こそ、表現するべきものだと思ひ、私は十五年ほど前に、生涯描き続ける画題は「生命」だと心に決めました。自分の生命を含め、この地球上の生命の持つエネルギーの謎を絵画を通して自分なりの方法で探りたいと思ったからです。

大きな謎に向けて、私はあらゆる現象に目を向けました。天で強烈な光を放つ太陽や、満ち欠ける月、動植物の生態、火山噴火、文明社会、戦争や平和などの人間の持つ価値観、自分の体……。興味を持った事から、そこにあると感じたエネルギーを描きました。

イメージを、よりリアルに表現しようとするほどに、目で確かめることの出来る形は崩れ去り、対象そのもののイメージが新たな造形を持つて自分の中にぶくぶくと泡のように生まれてきました。それ

はとても自然な感覚で、頭で考えて出てくるものではありません。見ることはできないけれども、感じることはできる。それがエネルギーであり、私の抽象画に描いているもののなのです。私が感じたものを、私を通して色と形にして生み出しているのです。

絵を描き続けて気付いたこと、それは、私達自身も宇宙であり、また宇宙の一部でもあるということです。同じく、あらゆるものは様々なエネルギーを持ちながらバランスを保ち構成され、存在しており、その全ては生命の力でひとつに繋がっているのだと考えました。その無限で永遠の繋がりがこそが宇宙であると。

私は、自身の宇宙観を描いています。そこには、私が生きていく中で感じた生命の力を表現したいと考えています。そして、人の心を動かすような絵を描けたらと願っています。絵には心を動かすエネルギー

ギーが宿ると信じています。人々の心が動くということが、どのような現象を世界に起こすことが出来るのか探りたいのです。物質的な欲に支配された世の中で、絵が心の豊かさを養うひとつの材料となり、その出会いが世界に新たな気付きを与えることが出来ればと祈りながら、そういう絵が描けるようになることを目指しています。それが、私の絵を描く理由です。

作品に様々な評価をする人がいますが、私は美術的な評価は気にしないで自由に描いています。絵を描く理由が、評価されるためではないからです。ましてや、お金のためでもありません。

そもそも、アートは評価ができるものではないと思います。アートとは、作り手の生み出した唯一無二の絶対的な宇宙なのですから。私の研究は続きます。



橘 高 み さ Kittaka Misa

- ▶ 1977 年 東京都出身（現在 安中市在住）
- ▶ 1996 年 大学で洋画を専攻 ▶ 2000 年 新生展入選（新生堂・南青山） ▶ 2001 年 多摩秀作美術展入選（青山市美術館） ▶ 2002 年 個展（ギャラリー路地裏・銀座） ▶ 2006 年 群馬県に移住 前橋市中心商店街にてシャッターアート制作 ▶ 2007 年 個展（高崎シティギャラリー） ▶ 2008 年 全国緑化フェアぐんまシャッターアートコンテストで NHK 前橋放送局長賞受賞 ▶ 2012 年 個展（高崎シティギャラリー） ▶ 群馬県美術展奨励賞受賞 ▶ その他 アートグループ「どじんじん」に参加。他、多数グループ展等に出品

自然環境調査からみた群馬の湿原と植物

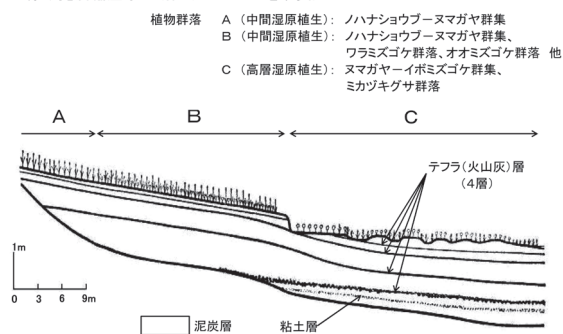
赤城覚満淵湿原

群馬県尾瀬保護専門委員 片野 光 一

赤城覚満淵（海拔 1,360m）は、大沼の南東にある湿地帯である。覚満川を堰き止めて作られた長径約 300m の湖沼があり、その北東部分を中心に湿原がある。湿原は、ヌマガヤの優占する中間湿原植生が広い面積を占め、北東側の湖沼の中に張り出した部分などにイボミズゴケやムラサキミズゴケの優占する高層湿原植生がみられる。湿原の上部は、ススキなどの高茎草原、レンゲツツジやズミの低木林を経て、山腹のミズナラ林に続いている。

覚満淵湿原は、筆者の恩師、堀正一博士がボーリング調査を行い、その成因を考察しているが、その後の筆者らの調査によって、成因を含め、植生や現在のような湿原になった経緯などが徐々に明らかになってきた。

赤城覚満淵湿原の断面 (Hori 1958 を改変)



ボーリング結果にもとづく断面図に示されるように、湿原は、ほとんど凹凸のない緩い傾斜の基盤上に形成され、湖沼に張り出した部分では 2.5 ～ 3.0m の泥炭層を堆積するが、泥炭層は周辺に近づくにつれて次第に薄くなる。泥炭層中には 4 つのテフラ（火山灰）層と薄い粘土層があり、最下部のテフラ層と粘土層の間の泥炭層中には湖沼堆積物の珪藻が多く含まれる。テフラ層の分布から、湿原の山側部分のフロントが、時代が新しくなるにつれ基底の緩斜面をはい上がり、湿原が上方へ生長するとともに水平方向に拡大していったことがわかる。

湖沼部分はボーリングができず、泥炭の堆積状況などは不明であったが、平成 18 年の調査時に赤城温泉御宿総本家で見せていただいた雑誌の写真がきっかけになり、様々なことがわかってきた。写真は、明治 45 年 7 月発行「山岳」第七年第二号に掲載された鳥居峠から大沼を望むもので、覚満淵には湖沼が無く、湿原と高茎草原が広がり、周辺部の低木林やミズナラ林が見られなかった。その後の文献調査などで、これが、明治の初期頃から行われていた放牧の影響であること（昭和 20 年代以降、放牧は行われていない）、築堤は大正 11 年頃（昭和 10 年秋に決壊したが、修築・改修を経て現在に至る）で、湿原を含む多くの部分が湛水し現在に近い状態になったことなどがわかった。これらのことから、湖沼部分にも泥炭が堆積しており、ボーリング結果と合わせると、覚満淵湿原は、かつての古大沼の周辺を埋めた碎屑物の堆積する斜面を流れる水をもとに、緩傾斜の基盤上に直接泥炭を堆積してできた、沼沢化型の湿原で、形成初期の段階では一時的に湛水することもあったと考えられる。

放牧と築堤が覚満淵湿原とその周辺部に与えた影響は大きい。湛水域にならなかった湿原部分でも踏み付け等によって植生の破壊・攪乱が起こり、湿原背部の高茎草原や低木林・ミズナラ林も大きなダメージを受けた。放牧が行われなくなってから約 70 年が経過した現在、二次遷移が進み、湿原周辺部の高茎草原や低木林では種組成などが徐々に変化してきている。20 年以上前まで多くみられたゼンテイカ（ニッコウキスゲ）の開花数が減少したのも遷移の結果であり、高茎草原の一部には光量不足によって成長不良になった株がまだ多く残っている。

群馬県・伊香保温泉



政府登録国際観光旅館
OYAL CHAIN ホテル加盟店
群馬県渋川市伊香保町396-20
予約直通 **Tel.0279-72-4489**

東京営業所 東京都台東区東上野6-10-7金子ハイツ503 〒110-0015
Tel. 03-3843-0083

埼玉営業所 埼玉県さいたま市中央区下落合4-23-10-101 〒338-0002
Tel. 048-856-1660

・料理茶屋 湯の花亭 上州四季の懷石



春 夏 秋 冬
味わいの旅
— 四つの食事処で料理が選べる —



想いを“かたち”にする。



株式
会社

藤田ビジネスプロモーター

前橋市問屋町 1-1-1 TEL 027-251-4455 (代) FAX 027-253-0057

<http://fujita-biz.co.jp/> E-mail fbp-npo.spirit@k5.dion.ne.jp

戸建からレジデンス
ペットとくらす
アパ|マン

大小店舗オフィス
倉庫工場
店舗|事務所

個人から法人
建物|土地

不動産有効利用
不動産活用

ローンのお申し込みは、群馬銀行へ！

住宅ローン「金利選択プラン」

選べる魅力で快適な住まいづくり

マイカーローン

自動車の購入・車検等に

教育ローン「仕送り名人」

入学金・授業料・仕送り費用に

住宅リフォームローン

ご自宅の増改築・補修・改修費用に

「ナイスサポートカード」カードローン

ホームページ・モバイルサイトからもお申込可能

フリーローン「おまとめ太郎」

ご返済をまとめて一本化

詳しくは窓口または、下記までお問い合わせください。

群馬銀行ダイレクトセンター

☎ 0120-139138 受付時間 9:00 ~ 20:00
土・日・祝休日、12/31 ~ 1/3は除きます。



あなたの夢、応援します。

群馬銀行

<http://www.gunmabank.co.jp/>



編集後記

◇ 日本には四季があり、春夏秋冬それぞれに季節感を感じさせるものがあります。雪といえば冬の象徴のようですが、立春を過ぎ春の訪れを感じられる頃降る雪は、なごり雪とも呼ばれ、春をイメージするもののようです。

どんな雪にせよ、子供の頃は、あんなにワクワクするものだったのに、今はドキドキヒヤヒヤ……。交通状況を気にして楽しむ余裕などないのは、少々寂しい気もしますが、やはり春の訪れが待ち遠しいですね。

(NH)

◇ 本誌希望の方は、送料(140円×希望回数分の切手)を添えてお申し込み下さい。また、ご要望ご意見等もお寄せください。

題字・群馬県知事 大澤 正 明

© 公益財団法人 群馬県教育文化事業団
(本誌からの無断転載、コピーを禁じます。)